

主体の解釈学

1982年1月6日の講義（第二時限）pp.33-50

K原

<前回（1時限目）>

- 「自己への配慮」という概念が、「どう生きるか」という技法を規定して他者を統治する生権力と結びついているかもしれない。そうすると、「どう生きるか」の技法が規定される（＝それが真理として示される）なかで、私たち（主体）がどう主体的に生きるのかということにつながっていくのかもしれない。
 - 「自己への配慮」は、ある様式に従い 1) どのような態度をとり 2) 視線を向け 3) 行動するかという技法（テクネー）の問題。主体が自らを変形させる、靈性による真理への到達の原理。この「自己への配慮」という概念は、もともとはネガティブに使われるものではなかったらしい。
 - 「汝自身を知れ」は、自分について知ったり、自分について考えたりする「認識」の問題。
- 真理へ到達するということと、主体そのものとのつながりが決定的に断ち切れ、真理には認識（＝「汝自身を知れ」）によって到達できるということになったデカルト的契機＝瞬間（モマン）があった。それは神学によるものだった。

<今回（2時限目）> ソクラテス・プラトンの契機において、自己への配慮は、若者の成長のための一時的条件から、全ての人の恒常的義務になったと理解しました

- ◆ 特に哲学的思考は、もともとは認識（＝汝自身を知れ）と靈性（＝自己への配慮）がひとつとなっていたが、しかしその後靈性という条件から乖離・分離していった。この乖離・分離は、デカルト的契機によって「決定的に断ち切れ」たようだが、しかしその一度の契機のみですっぱりと断ち切られたわけではないらしい。何度かおすびつきを断ち切られた契機があるということのようだが、自己への配慮（＝靈性）について、（結局いくつの契機があるのか不明だが）3つの契機が示され（1. ソクラテス・プラトンの契機（自己への配慮の登場）、2. 自己自身への配慮の黄金時代（紀元後最初の2世紀）、3. 異教的・哲学的修練からキリスト教的禁欲（＝修練）主義への移行（4-5世紀）、今回の第二時限ではそのうちのソクラテス・プラトンの契機（の途中まで？）が詳細に取り上げられていた。
- ◆ このソクラテス・プラトンの契機は、自己への配慮（靈性）の登場であり、ごく初期は自己への配慮は若者がその師とのあいだに、あるいは愛人との間に、あるいは師かつ愛人であるような人との間に取り結ばれる関係における活動であり、若者の成長のための契機であり、『アルキピアデス』にみられる自己への配慮は、身分上の優位を政治（＝他者の統治）へと移行するのに必要な条件とされていた。その後、自己への配慮は、あらゆる個人の生涯を通じての恒常的義務になっていく（『ソクラテスの弁明』にみられる自己への配慮）。つまり…ソクラテス・プラトンの契機とは、自己への配慮は若者の成長のための契機であり一時的・限定的なものから、すべての人の恒常的義務へと変わっていった、ということか？
- ◆ ただし、この自己への配慮の登場（＝ソクラテス・プラトンの契機）において、2つの問題が出てきている。
 - 1つめの問題：自己への配慮の自己（つまり、主体と呼ぼうとしているもの）とはなにか？
 - 2つめの問題：自己への配慮に向き合い、真剣に取り組んだらどうなるのか？

靈性の諸要請がひきおこした摩擦。デカルト以前の科学と神学。古典哲学と近代哲学。マルクス主義と精神分析（pp.33-8）

- 靈性とは自己への配慮のことで、これが切り離された。靈性と神学の間（科学ではない）に衝突があった。
 - 靈性と科学の間には構造的な対立はない：「主体の存在における深い変化なくして知はあり得ない」
- デカルト的契機において断絶が決定的に生じたと考えべきではない。
 - スピノザの知性改善論：真理への到達の問題は主体の存在そのものにかかわる一連の要請と結び付けられていた（＝主体の変容、つまり靈性と結びついていた）。カント以降：靈性は消えていない。デカルト哲学・17世紀の哲学以来：ひとが靈性の構造から引き離そうとしていた哲学を同じ構造の中で再考するようになった。19世紀の哲学：再び自己への配慮へ配慮するようになっている。

- 科学ではない、本当の知とは言えないマルクス主義や精神分析といった知の形式にも、靈性（＝自己への配慮）の要素の一部が認められる。
主体の存在のなんたるかという問題と、真理に到達することで主体において変化しうるのは何かという2つの問題は靈性に特徴的で、いずれの知の核心部分にも見出すことができる（言い過ぎなら出発点・到達点に見出せるとのこと）。これらの知の形式において見出される問題、問いかけ、要請といったものが、自己への配慮、真理への到達の条件としての靈性という、何よりも古くなによりも根本的な問題であるように思われる。あとラカンの話をしてきた（略）。認識（精神分析）において、主体の真理は靈性（＝自己への配慮）の視点からは問題を提起できない。
- ひとはいこれらの知の形式に固有の靈性のそうしたさまざまな条件を社会的形式の内部に隠そうとしてきた。→マルクス主義や精神分析がその一例ということか。

自己への配慮に関する3つの契機

- 1) ソクラテス・プラトンの契機（「自己への配慮」の登場）
- 2) 自己の陶冶、自己自身への配慮の黄金時代（紀元後の最初の2世紀）
- 3) 異教的・哲学的修練からキリスト教的禁欲（＝修練）主義への移行（4-5世紀）

このうち、第二時限では1)のソクラテス・プラトンの契機が詳細に説明されていく。

1) ソクラテス・プラトンの契機（「自己への配慮」の登場）（pp.38-48）

- **スパルタの格言。身分と結びついた特権としての自己への配慮**（pp.38-40）

「自己へ専心しなくてはならない」とソクラテスが言い出したのではなく、もともとスパルタの格言だった。自己への配慮は特権だった。

なんで農奴に土地を耕させ、自分たちではやらないの？と聞かれ、スパルタの人は「なに、自己に専念するためですよ」と答えた。自己への配慮は身分的な特権だった。

- **プラトンの『アルキビアデス』の最初の分析**（pp.40-2）

プラトン著『アルキビアデス』により、自己への配慮の登場に関する説明がなされていく。

- アルキビアデスって誰：ソクラテスの愛弟子のアテネに生きた少年（青年？男性）。のちにアテネを統治するが、失敗してアテネが破滅する。美しすぎて愛人がたくさんいた。同時に傲慢で、それにより愛人をはねつけてきた。その間に、彼は愛の対象にならない境界年齢に達してしまった。ソクラテスは、神の声を聞いた1人アルキビアデスを追いかけて続いていた。アルキビアデスは自分の美しさに甘んじることはできず、彼の特権的な身分、身分上の優位を政治的行動へ、他者の実際の統治へと転じようとする。その瞬間、ソクラテスは自己への配慮を政治への移行の条件として説く。アルキビアデスは、無知な奴隷によって教育を受けた（＝教育を受けていない）。
- ソクラテスって誰：ギリシアの最初の哲学者。「無知の知」でよく知られている。第一時限で見たように、裁判にかけられ、弁明を行う。死刑が宣告されるが、とあるきっかけで死刑が1ヶ月延びる。最後は毒杯を飲み亡くなる。アルキビアデスとは師と弟子の関係。
- カルミデスって誰：アルキビアデスより少し年上の若者。すでに政治に参加しており、評議会に参加して意見を述べたりしている。しかし、彼は内気で、公の発言をする勇気を持てずにいた。ソクラテスはいいから自分のことに少し注意を向けてみなさい。自分自身に気をつけて、自分の美点に気づきなさい。そうすれば、政治生活に入ることができるでしょう、と伝える。カルミデスへのソクラテスの励ましには、「気を付ける」という表現が用いられている。

<ソクラテス周辺の時系列>

（略）→アルキビアデスが政治の道に移行しようとする→ソクラテスが自己への配慮を政治への移行の条件としてアルキ

ピアデスに伝える→アルキピアデスはアテネの指導者になるが、しかし国の統治を誤る→アテネ破滅（ペロポネソス戦争敗北）→ソクラテス告発され裁判で訴追される→ソクラテス裁判で弁明する（弁明の中では彼は哲学者であらゆる人の生存にかかわる恒常的義務として自己への配慮を伝えてきたと言っている…）→（略）…これであっているか？

アルキピアデスの政治的要求とソクラテスの介入（pp.42-5）

- カルミデスの場合は、その賢明さにも関わらず、公の政治生活に入ろうとしない彼をソクラテスが励ます必要があったが、反対にアルキピアデスは性急な若者で、身分上の優位を実際の政治行動へ転化させることばかり求めた。
- アルキピアデスは、愛の対象にならない境界年齢に達したときに、身分上の優位を政治的行動へ（＝他者の統治）に転じようとする。その際、ソクラテスは「君が都市（ポリス）を治めようと思うのなら、2種類の敵に立ち向かわなくてはならない」と伝える。

*2種類の敵：内部の敵（都市の中で出会う）と、都市にとっての敵（＝外部にいる都市の敵）のこと。ここでは、例えばスパルタやペルシャが外部の敵として言及されているが、ペルシャに関しては割と遅い時期から興味が見られるとのこと。

スパルタの若者およびペルシャの王子の教育と比較したアルキピアデスの教育（pp.45-6）

- アルキピアデスは、この2番目の敵、つまり都市にとっての敵（スパルタやペルシャの若者・王子）よりも劣っている。なぜなら富も教育もないし、その2つの欠如を補い、敵と同等程度になるための唯一のものである知、技法（テクネー）がないから。→ここでフーコーの言っている知には、技法（テクネー）が含まれるということだ。そしてテクネーがない、ということは、自己への配慮がない、ということになるか。

*実際にソクラテスは、アルキピアデスにはテクネーがないことを長い一連の問いかけから示す。その問いかけから、アルキピアデスは、都市がうまく統治されているのは、市民のあいだに親愛（コンコルド）が成立しているときだという定義に辿り着く。しかし、その親愛とはなんなのかという問いには答えられない。そして、アルキピアデスは自分の無知を恥じる。その後、ソクラテスはアルキピアデスに言う。「心配するな。自分の恥ずべき無知に気づき、自分が何をいつているのかすらわからないと気づいたのが五十歳だったとすれば、それをなんとかするのは大変難しいだろう。というのも君は、自分の世話をするのが大変難しいだろうからだ。しかし「君の年齢は、まさにそのことを覚るべき、ちょうどいい年齢なのだ」→弁明の中の話と違う…

- この話の中に、「自分の面倒をみる」とか「自分の世話をする」という表現が登場する。

『アルキピアデス』において自己への配慮の要請がはじめて登場する際の文脈設定。政治的要求。教育上の不足。境界年齢。政治的な知の不在（pp.46-7）

- 自己の配慮について、ここで4点『アルキピアデス』からフーコーの指摘がまとめられている。→この指摘は、ソクラテスは「汝自身を知れ」で知られているけど、この話は「汝自身を知れ」（＝認識の問題）とは違うよね」という視点でまとめられているということか？
- 1) 自己への配慮の必要性が、権力の行使と結びついていること：伝統的には自己への配慮は、格言のように身分上の特権的なものだった。一方、アルキピアデスのこの話では、自己への配慮は身分的な特権としてではなく、政治行動へ、実際の都市の統治へとアルキピアデスが移行するのに必要な条件となっている。自己に配慮していなければ、自分の特権を他者に対する政治行動へ変容させることはできない。→特権と政治行動のあいだこそが自己への配慮（霊性、自己の変容）という概念が出現した地点とのことだが、格言のような伝統的な自己への配慮（＝身分的特権）とアルキピアデスに見られる自己への配慮（移行の際の一時的な条件）との関係がよくわからなっていないけど→あらゆる人の自己への配慮（生存にかかわる恒常的義務）、ってことか？
 - 2) 自己へ配慮する必要性が、アルキピアデスの教育の不十分さと結びついていること：ということは、アテネの教育が不十分だったということになるが、この不十分さには2つの側面がある。→ここはアルキピアデス自身ではなく、そ

の周り、環境の話をしているから「汝自身を知れ」ではないということか。

1. アルキビアデスの教育（師）が、無知な奴隷だったこと。政治の道に進もうという若い貴族を身近な家族の奴隷に委ねるのは適切ではない。
 2. 少年への愛（エロス）が、アルキビアデスにたいして、それが果たすべき役割を果たしていないこと。彼の体目当ての男たちは、彼が自己へ配慮するよう促そうとしない男たちだった。彼らはアルキビアデス自身に興味を持っていたわけではなかった。なぜそう言えるのかというと、もしもそうならアルキビアデスに自己へ配慮するよう促すからだ、ということのようだ。だから、アルキビアデスが若さを失うと、彼らはアルキビアデスを見捨てた。→このエピソードから言えるのは、自己への配慮の必要は、政治的な企図だけではなく、教育上の欠陥のうちに書き込まれているということ。（＝アルキビアデスだけではなく、アテネのアルキビアデスの体目当ての男たちの教育も不十分である、ということになるか。）
- 3) 教育者の手を離れ、政治的活動の時期に入ろうとする境界年齢のときこそ、自己へ配慮するすべを学ばなくてはならないこと（＝ここは自己への配慮の技法、すべということか？つまり認識の話ではないということか）。
- これは「ソクラテスの弁明」とは矛盾している。ソクラテスの弁明では、ソクラテスの仕事は「神々によって私に委ねられたもので、町中に立ち、若いも若きも、市民もそうでない者も、みんなを呼び止めて自己へ配慮するように言う」というものであった。ここでの自己への配慮は、あらゆる生存エグジスタンスにとって一般的な機能としてあらわれている。→自己への配慮は、誰にとってもその生存にかかわる機能になっている。
- 一方、『アルキビアデス』では若者の成長において必要な契機としてあらわれている。→自己への配慮は、誰にとってもではなく、生存でもなく、若者の成長のための契機になっている。
- よくわからないけど、アルキビアデスのような若者の成長のための契機ではなく、あらゆる個人の、生涯を通じての恒常的な義務となったとき、自己への配慮の大きな論争点のひとつ、大変化の生ずる点のひとつとなるでしょう、ということは、アルキビアデスのほうが先で、ソクラテスの弁明の方が前、という想定になるという理解で正しいか？→正しいみたい。だから、ごく初期のソクラテス＝アリストテレス的契機においては、自己への配慮は若者がその師とのあいだに、あるいは愛人との間に、あるいは師であり愛人でもあるようなひとたちのあいだにとりむすぶ関係だった。
- 4) 自己への配慮の必要が急に突然現れるのは、アルキビアデスが政治に関わる企図を口にしたときではなく、彼が自分の無知に気づくときだった。彼が知らなかったのは、彼が配慮すべき対象とのも、その性質。自分が国務につきたいと思っていることは知っていた。彼は自分の身分がそれをする十分な理由になると思っていた。しかし、それをどうやったらよいかはわからなかった。自分の政治的活動の、目標であり目的でもあるようなものが何なのかわからなかった。だから彼は、自分自身に配慮しなくてはならない。

自己のはっきりしない性質と、その政治的な含意 (pp.47-8)

2つの問題→1) 2) が靈性に特徴的なものだから問題になっているということか？

- 1) 自己へ配慮しなくてはならない、というときに配慮すべき自己ってなんなの？（この「自己」とは「個人」とか「人間」のことではない、とのこと）

「アルキビアデス」の対話篇には「人間の本性について」という副題がついているが、後になってつけられたもの。このテキストの最後の部分の展開、ソクラテスが問い、答えようとしている問題とは「君は君自身に配慮しなくてはならない。さてきみは人間だ。つまり問題は人間とは何かということだ」といったものではない（＝これは人間という「個人」についての問い）。問題は、「きみは君自身に配慮しなくてはならない。しかしこの自己 (auto to auto) とはいったいなんだろう。というのもきみが配慮しなくてはならないのは、きみ自身なのだから」ということ。この問題は、私たちが主体の問題と呼ぼうとしているものに関わる。個人から発して自己にめぐりきたる、この反照＝反省的な活動、この反照＝熟慮された活動が向かう、この点とはいったい何だろう。この自己とは何だろう。

2) 自己への配慮をちゃんとやった結果ってどうなるの? →主体が行動したとき、主体に変容はあるのか?

自己への配慮が適切に展開され真剣に受け止められたときに、アルキビアデスを、他者を統治しようとする
さいに必要としている技術へと導くのか?

- この対話篇の論点は、統治しなくてはならない他者に適切に配慮することができるために私が配慮しなくてはな
らないこの自己とは何かということ。

(わからなかった) 個人と主体の違い (第一時限でも出てきていたが、きちんと追えていなかった)